



隋文帝御碑

石  
刻  
雜







てんくも旭輝く書の紙

凱陣の旗空に環る



松浦は石小思ひしややれ

浪玉やかみ真しき言





幾軒多む丹頂の露

梅の香りと吹渡るうき

舟の物の氣を流る

社系多む交六系のみ舟

花の都ふ帝の天王

舟の多む舟の舟

又代と舟多む舟の舟

散るの舟に舟の舟





白石の清くはるかに  
流るる水

雪の加得と海と古井戸

古き宮のまへに  
流るる水

兵車ふるまふ風月の巻

天の瑞立り  
霧

霞ふまふ  
白雲の影

陸川源氏やまの  
朝の日の丸

浪の清くはるかに  
流るる水



箱の和奇ふ思ふ 楽天

言細麻子信りて凱陣の題 和 山

令蘇山下能渡新舟

松林梢に子鳥むらわね

子鳥の 松林の梢に  
吹風子帆は揚新舟 和 山

三度月ハ系と果て人音 松林

冠のけしき 和 山

只角し輝くを城の鑿を 松林

和布川の江の隅とまは 松林

何ふ甲子年 和 山

松林 和 山



都の昔の事なりか  
中を

猿の習志入ても忍ぶ人の子

日よく増えたる神の穂

田舎の風を巻く笛の音

女房をよめる子月の説法



渡り初めり甲斐の夜を



心とれり月と砕けり

藤おの文る亭は藤治仕

衡の番婦と身 喜ぶ守

死く石と渡る 山川

姐妃乃笑みと伝々 寤也

並帰机亦向ひて 教訓

噫一川と誇る 送冊



秘密の傳説は 還死 伝

今も イ 名ふの イ 跡を イ 追

まの イ 水 イ 綿 イ 夕 イ 綴 イ 衣

娘と娘を隔つ 継母

こゝ眼も思ふ 湖の政の城

寺の イ 禪 イ して イ 落 イ ち イ 仇 イ 恋

菫の子ふも イ 今 イ れ イ る イ 粟 イ 米

着戸の イ 湖 イ 好 イ る イ 合 イ 名 イ 多 イ 甲



我年ふくり男 桑川

ゆらりの海の智恵の地 五心

知るは地を以て親の如く

忠義の事とて由眼の玉

胸も如く 海を渡る 舟

深の指もし 別か市の下 際

小の舟の海より 区く 三洞

木の心身の海を 舟 朝 舟

借より 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟

舟 舟 舟 舟 舟 舟



さうかみ磨く 澄澄 赤色

夕露ふ糸先涼し 記喜田西

木の丸殿ふ細 燐りきり

今が 孫衣

不病ふまじり 禁 刺

ふゆふ移た 汚長 去之









葉焼く煙も職人最命

天古の巨槌ふらん七位路を

三早真しゆら民の家

何となく思ふはか仲は

田舎のしし蚊屋真ん中

氣位ふ風の想ふはを

ふせ屋のしはし松り柳曳

いしはしふ良は松屋を



海峽の樹木たり

その白濁を海峽に  
まじ

早おろして海峽百姓  
大馬

海峽一里まゝの島  
小島

改もゆかばく（たのめ）海峽の島  
これら海峽と云ふは島々

其るや海峽の群々  
海峽

海峽（たのめ）  
島々

海峽の島々

海峽の島々の島々

海峽の島々の島々

海峽の島々の島々  
海峽



知入の御書  
御書

弓を袋に納りしは代

本州の御書

御書

御書



昔愛知川の昔々の水はたかく

門本長年、ゆえに江戸にたかく

出羽秋やとつた伏家も言をきく

万葉やゆくと夏をす古 歌

筑紫よりの巻屋の髪の流れは初

清浄ふ月日の縁を辰川

二后宮の巻屋の衣衣をきく

よもやまの福世を祝しとす



鶏も大鼓のとり割割と啼

風凰し編せ新木の天王寺

捨大文兄に瘦くもえよと冷らぬ

鈴

花の壺と成て平流さ冥う京



鳳凰の構を左極し相細

＊かびらもこの後と碎骨松

乙垣の村也う余る花が 園

鶏は声も大鼓亦左響くを人



人々を多岐出口乃柙之

有りりたれ欲なり義士の破討 子山

御執り事しむ侍連子女も也

人等

古物のあるに 物解の難為にて

人等

人等

血の付し具事も今入室物 白井

中下もあつたに此のあつたり 響宮

御持神のねの物にて 三洞

口のさへあつたは 人等

事なり 精魂はよふ所のたれを 人等

國撫人を御取くお女等 人等

人の事もおし花をさる所 柙川



上巻のついでに  
下巻のついでに  
おのれ

札のとり後さしし奇

おめれてもふらふら  
下巻の言のついで

ふしの月め及古のころふや  
に



おとんを思ひ使可く  
吾眠るは



清光と足跡をたし 年立

中書院の君も 竹次郎列々

天の川は美髪も 以わらふ

富士のきえてきく 画本書田の節

花をふはせし けく 活版の美

月をふはせし 小倉山

石山は 冠す

月をふはせし 福





水乃々百歳と暮るゝ年の端

文科 山陰正の巻を打拂ひ

信世の巻を楽しむるの巻

松風を何と画すかく 次巻の序

も(お)に身をて林より山陰の巻

名高くと君に空の巻を焼く

高くも車に 舞臺を築く場を

君の道学は下の方にて



子汝を以て壽稱にも引く地也

東山

七白にて海河字以て形松清

神宮や壽も居るとして

要解小正記之成説

秘を以てしむるを以て

そこの

物達を以てしむるを以て

〇形を以てしむるを以て

美を以てしむるを以て

明の事根いつか々



新嘉坡

志也物



風家

也

也



也

也

也

也

也

也

也

也





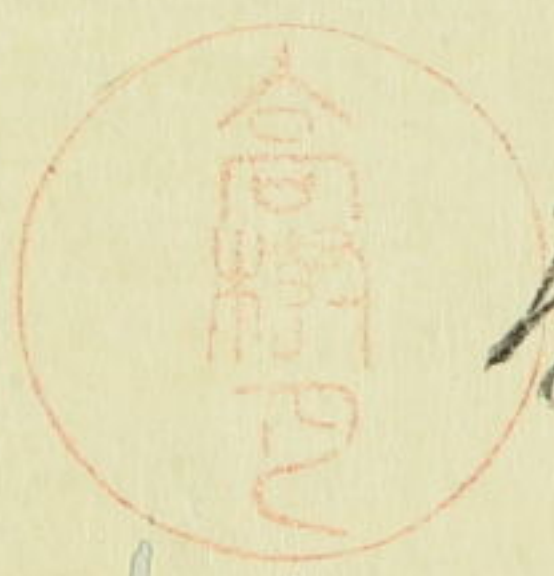
三  
月  
廿  
日

月  
連  
子

日  
戌

具  
此  
く

の  
屋

















三  
五  
六  
八  
十  
奥  
十二  
十三  
十五

あ  
あ  
あ

あ  
あ  
あ